

年頭所感

「次の段階へのステップアップ」



日本膜学会会長 松山秀人

日本膜学会会員の皆様、またこの膜誌に目を留めていただいた皆様、新年明けましておめでとうございます。新しい年の皆様の益々のご健勝とご活躍を祈念しています。

さて2019年は亥年です。「亥」は、非常に安定した状態で始動を待つ準備期間を意味しているそうです。まさに次の段階へとステップアップするタイミングを狙っているといったイメージです。日本膜学会が次の段階にステップアップするためには、どのようなことが必要でしょうか。2018年の活動を振り返りながら、所感を述べていただきたいと思います。

1. 日本膜学会第40年会

組織委員長川上先生，副組織委員長丸中先生のもとで，早稲田大学を会場にして開催されました。参加人数は245名でした。Fig. 1には各年度における年会の参加人数の推移を示しています。凹凸はあるものの，おかげさまで概ね右肩上がりの参加者となっており，好ましい状況と言えます。しかしながら例えば「参加者400名の実現」といった次の段階へのステップアップを目指すためには，昨年（2018年）の年頭所感でも書かせていただいたように「若手の活躍」が重要と考えます。「膜学若手研究者の会」が大橋先生（東京農工大）を中心として2017年に発足し，膜学若手討論会が毎年積極的に開催されています。また2018年度は田中先生（関西大学）が日本膜学会膜学研究奨励賞を受賞されました。若手研究者の方にはもっと積極的にこの賞に応募していただきたいと思います。最近Science誌やNature誌にも膜学関連の論文が頻繁に発表されていることから，膜学分野の魅力をもっと他分野の若手研究者に紹介し，ぜひとも数多くの若手研究者に日本膜学会に入会してもらえよう，勧誘していければと考えています。

ステップアップのためのもう一つの重要な点は「企業会員の満足」です。本年会では，前年に引き続き2回目となるランチョンセミナー（旭化成㈱が担当）が開催され，大変盛況でした。また初めての試みである「企業からの発表セッション」では，座る席がないほどに発表会場は活気に満ちていました。また今年の年会ではロビーで展示をいただいた企業にも話をさせていただく場を設けたいと企画しています。日本の膜関連企業は世界的に見ても大変アクティブであるにもかかわらず，まだまだ企業からの参加人数は多くは無いように感じています。このような活動を通して，これまで以上により多くの方々に年会にご参加いただければ幸いです。

また昨年の年会では40回目という節目であったこ

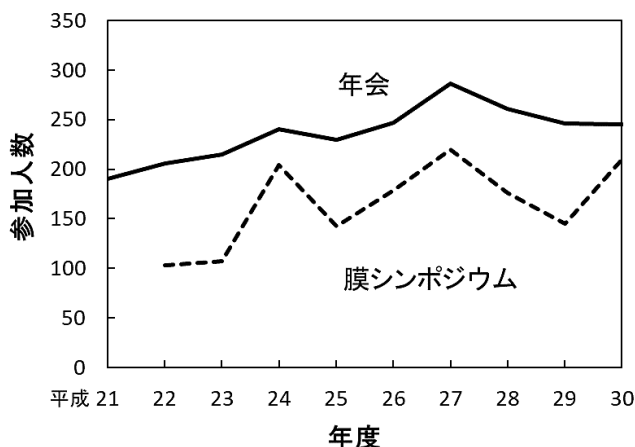


Fig. 1 年会及び膜シンポジウム参加人数推移

とから、韓国、台湾及び中国の各膜学会から会長あるいは副会長の先生をお招きし、特別講演を行いました。各国の膜学研究の実情を知る上でも非常に良い機会であったように思います。「国際化」もステップアップのための重要なキーワードです。今年の年会のシンポジウムでも、引き続き海外の研究者の講演を企画しているように聞いています。

2. 膜シンポジウム 2018

運営委員長吉岡先生、副運営委員長馬越先生のもとで、神戸大学において開催されました。参加人数は210名でした。膜シンポジウムの参加人数も Fig. 1 に示していますが、こちらの参加者もおおむね右肩上がりとなっています。ただ、そもそも膜シンポジウムでは議論を十分に行うことを目的としているため、参加人数の増加ばかりがゴールではありません。しかしながら膜シンポジウムにおきましても、若手研究者や企業参加者がもっと活躍して満足できる企画が必要と思います。そのためには従来の1会場での開催にこだわらず、複数の会場を用いた開催も検討してみてはどうかと思っています。

3. The 11th Conference of the Aseanian Membrane Society (AMS 11)

AMS 11 は、昨年オーストラリアのブリスベンで開催されました。膜誌43巻6号で、野村先生（芝浦工大）を中心に詳細な内容が紹介されています。参加者の国別内訳は、中国68名、韓国61名、オーストラリア+ニュージーランド57名、日本47名、台湾22名、シンガポール14名でありました。アジア・オセアニア地区における日本のプレゼンスの低下が、第4位という参加者数に表れているように思います。日本の膜学研究が世界の大きな成長の潮流から取り残されることを危惧しています。日本の膜学研究者は、多少の無理をしてでも、海外の学会で自身の情報発信をもっと積極的に行うべきではないでしょうか。日本膜学会としましても、そのような海外展開を後押しするような活動が必要ではないかと思っています。

4. 一般社団法人への移行

日本膜学会の一般社団法人への移行につきまして、昨年の理事会で議論がなされました。現在ワーキンググループにより検討が行われています。今年の年会時の総会でご説明させていただく予定にしております。

最後になりましたが、今年も引き続き、日本膜学会の次の段階へのステップアップに向けて、より一層のご支援、ご鞭撻を賜りますよう、改めましてお願い申し上げます。